戦前台湾における個人的伝道（2）

香川大学大学教育基盤センター
非常勤講師
山西　弘朗 *Hiroaki Yamanishi*

女性布教師による個人的伝道

個人的伝道について、前回（7月号）では、台湾伝道の嚆矢となった古谷マツ（防府）を取り上げた。今回は同じく女性布教師として有名な加藤きんを紹介したい。きんによる布教によって大正6（1917）年に設立された嘉義東門教会（山名）は、第2次世界大戦後にすべての日本人が内地に引き揚げた後も教会の建物が保存され、現地の信者たちによって信仰が続けられた唯一の教会であり、これまでも注目されてきた。きんの布教については、昭和57（1982）年に金子圭助が執筆した『炎の女伝道者加藤きん』（天理教道友社）において詳しくまとめられている。ここでは、その内容を要約しながら、加藤きんによる個人的伝道について述べることとする。

加藤きんによる伝道

嘉義東門教会設立につながる加藤きんによる台湾伝道は、きんが渡台した明治37（1904）年に始まった。きんは慶應3（1867）年1月30日、愛知県で名字帯刀を許された加藤甚三郎の長女として生まれた。加藤家は尾張犬山城主の金融御用達を務めるほどの商家であった。きんは東京の某寺に養子として望まれたが、寺を嫌って佐野家へ嫁いだ。きんは長女で婿取りの身のため、終生佐野姓を名乗らなかった。夫である佐野弥市郎は工事の請負として働いていたため、各地の職場を転々とした。きんが天理教久之浜出張所（福島県）を初めて訪れたのは明治33（1900）年頃、次女のひさが脊椎カリエスの身上を患ったためであった。きんは偶然、ある婦人から天理教の教えを聞き、その婦人とともに出張所を訪ねることとなった。出張所でおさづけを取り次いでもらい、毎日出張所へ参拝するにつれてひさの病状は快方へ向かった。その中で、きんは信仰に目覚めることになった。やがて夫の請負工事が終わり、次の現場のある住所へ転居することとなった。そのため出張所から遠のいたことで、きんの心も信仰から遠のき、ひさの病状もまた悪化した。そこで、きんは再び出張所へ参拝することを決意し、片道16キロの距離を娘を背負って歩いて通った。ひさの病状は一時快方へ向かったものの、再び悪化し、13歳で亡くなった。

明治37（1904）年に夫が台湾・嘉義にある阿里山のトンネル工事を請け負ったため、きんは長女のまさを連れて夫と台湾へ行くこととなった。ところが神戸港で台湾航路の横浜丸に乗船した時、きんは突然「一寸用事を思い出したから、一便遅れていきます。」と言って夫と娘と別れ、その足でおぢばに参拝、別席を運び、本席・飯降伊蔵からおさづけの理を頂いた。きんは「一便遅れる」と言ったが、実際には2年後の明治39（1906）年1月に阿里山にいる夫の許にようやくたどり着いた。きんを見るなり弥市郎は激怒し、きんは村のはずれにある祠で一人寝起きすることとなる。きんは弥市郎に見つからないように日本人労働者のまかないを作る炊事場で働くことにした。このような生活が数カ月続いたころ、きんが炊事場で働いていることが弥市郎に見つかり、寝起きしている祠から引き戻されて、まさのいる宿舎で暮らすことになった。きんは、日本から大切に持参したお社を机の上に据え、朝晩おつとめをして、拍子木を打った。これに対して、夫は激しく反対した。

ちょうどその頃、同じまかないを作る炊事場で下働きとして雇っていた先住民族婦人（ツオウ族）の6歳になる息子が、首筋に大きな腫物ができ、苦しんでいた。当時、山には医薬はほとんどなく、薬草を叩いて患部に当て祈禱師に祈ってもらうだけだった。きんは見かねて、夫の反対を押し切って朝夕病気平癒の祈願を行い、三日三夜と日を切っておさづけを取次いだところ、腫物は不思議にも治った。これがきんの台湾で初めてのおたすけとなった。やがて弥市郎はトンネル工事の請負工事を終え、嘉義で道路拡張工事を請け負うこととなり、一家は嘉義の街へ下りた。

嘉義の街できんはさらに布教活動を本格的に行おうとしたが、夫の反対が強くなり、暴力を振るわれることも多くなった。これは、夫が行く先々や同業者からきんの熱心な布教活動を揶揄する話を耳にすることが多くなったことも原因であった。しかし、どれほど夫から信仰を咎められても、きんは意に介することなく、大正元（1912）年秋に7年ぶりにおぢばに帰り、天理教校別科第9期生として入学した。この頃、長女のまさは日本で結婚し2人の子供がいたが、夫と死別したため、子供を連れて親戚の家に身を寄せていた。そして鍋吉（後に嘉義東門教会二代会長となる）と再婚し、きんがもともと住んでいた愛知県犬山の家で生活していた。そして鍋吉との間にくめという娘も生まれた。きんは弥市郎にも会わせてやろうと当時6歳になっていたくめを連れて嘉義に帰ったが、夫はマラリアを患い、入院していた。病状は快方へ向かうことなく、翌大正2（1913）年に亡くなった。きんは異郷の地に孫娘と2人取り残されたが、内地へ引き揚げようとはせず、言葉も分からない台湾人社会の中に入り込み、誰からの支援もなく布教活動を続けることを決意した。

きんが最初に布教所を開いた住まいは、街なかにある観音廟の近くで、清朝時代に刑場として使われた場所だった。間仕切りのない土間で炊事場も便所もなかった。この布教所を拠点として台湾人の家々を回って病人を探し、布教を試みたが、言葉が通じず困難を極めた。当時、台湾の漢人社会では病気の時、祈祷師を招いて治してもらう風習は一般的だったが、和服を着た女性が意味もわからない天理教の儀礼を行うことは容易ではなく、病人におさづけを取り次ぐよう頼んでも、ほとんどが怪訝な顔をされて追い払われた。そのため、きんは家の外からおさづけを取り次ぐようになった。

しかし、こうした困難な布教を続ける中で、不思議にも病気が治ったという人が現れ始め、おさづけの取次を求めて布教所を訪れる人も出てくるようになった。その後、台北の女学校を卒業したある台湾人女性と知り合い、この女性が通訳として布教を手伝ってくれるようになった。やがて熱心な信仰者も現れ、大正5（1916）年の教祖三十年祭の年に、きんは初めて数人の台湾人信者を連れて、おぢばがえり団参を実現させたのである。

[参考文献]

金子圭助『炎の女伝道者加藤きん』（1982）天理教道友社。